景清外傳 一編 四

へ 13
2891
4

景清外傳松の操巻之四

第六回

龍神を祭んと欺して名取を奥ふ
君を欺んとして身命を亡す

東都 鋒山戯編

這裡雑波次郎は。検非違使の下司として。高倉宮以璞友の乏死守乃砌に向ひたる長谷部信連が為に辛苑男をあひ這ての体かく逃たまひしが。人にても不覚者なりと笑ひあざけれど。人に面を合すべうもなく引籠りて居たりけるに。こたび平相国さまの武勇を励み主君をうしなひ人にも手柄の有る処と思ひ。嘆き羨まれ威権はなく時めく上臈浪人を集め姫君のしる姫ひめる此當時太政入道清盛遷都の企頻りに速に功を成んとせしは小松内府の在さぬ時

昭和九年七月三日 購求
門 へ 13 2891 巻 4

ときふく諫め止むべし。舊臣ハ尚も强く諫めく入道の命に從ふもののほかに
よし難波の都は今の宜時なりと勸めてまた喜び、ここに於て入道相
國に渡を遷都のことに聞しなれ只願ひに希需しけれバ頼むべき人を霊塔當時
なきに限りなく喜び俄に難波の都を西八條に召出し、遷都の事を命じおひ
是旅と猿子おひ名を後入道どのハ難波以下の人々をおく攝津國兵庫に
引あふ移て攝津國菟原郡布引の瀧の下をきてなふ此瀧のところ當國第一の
名瀧なり。瀧壺見聞に通じ神龍住めりと言傳へりければ相國入道どのハ
此回兵庫の沖に築島の志ありて頻るゝバ龍神の加護によりて築島成就
あらんとて此瀧に参念しおひしが此瀧壺の龍神の冥助を祈られまんと。
光ぐく此布ある立おもひ風色を此處に数十丈の山の頂より落下る飛泉
いと白くて只是数匹の布を継ぎ継ぎ曝しに異ならず。夏ハ涼しくすゞしくて布引乃

瀧と號し縁由を感悟しつゝも頻に喜ひなくうち頻りく勢せしが此池の水の色
の藍のごとく清らかに深さ測るべからず。されど神龍の住るべく思へば
入道どのそのまゝに立寄りて腰に佩ひたる太刀をぬきて此瀧壺の龍神
に捧げ。築島の成就を祈られしと難波をはじめ命あり、今世に入道どの佩ひ
る太刀ハ雷丸とて昔悪源太義平が秘蔵せしたる太刀なり。彼義平切支
切りけり。むかし聞えぬ名剣なりしが義平亡びて入道どのこれを得て佩ひ給ふ。
難波の都頻くよりて此雷丸の太刀ををしく望まれしかど、入道どの在
さへ言ず。强て乞はれて召しける。只今此太刀をもちて瀧壺に沈めんとある命を
聞。頻に惜しと思ひしが色を正しく云いけるハ此瀧ハ満ちて人とも龍神
納まりく何か言ん。其の雜せざるものなど手へきせる事にも、いつか喜び
おべらんや。而かいふべきに祈るとも、何の驗もあるべき。其ゆゑ人の妻の人血を好

と。今此銀を泌を止めて人をもそ憐と思へば、執柄此を恭んで祈る無益納受せんと
主が喜悦巧みに云ひ手の言ゆゑ入道どの熟々聞て難波が弁才に欺かるゝこれを恥ずし
とおもひけるが、ちらと運て宣ひけるは、汝が申す処道理あり。太刀を捨るは人なりそ。
執柄に供せんと思ひつれども奈何せん。命惜まぬ人なき武と暫時沈思に
落て大難波次郎うち笑ひ、元は人の臣として君の為に一命を捨るを
願くのまひあるにまかひく、是ハ我為益なるんとしのみ善悪をなりあへ陰ろ
否とやべきや。角るの世の中に僅しなきの供の人とかぶ。其々を憐となりて君
の御名を残す。まつらしかりんと云人なきぞ有りけり。戦陣に望ところ
討死さるも世瀬毒に浮く死も我思ひに一つハなきもの武。差来不肖
ながらいへども、様となりて我君の思ひを遂しぬるべし。最期に望
みて願ふわりの此兜さらんやと池ゑのきさあまて呼入なる入道どの八難

波次郎が儀とあへしとらみ残念く感じおもひけるべ、入道殿はそそがけるさてしと
おぼへ太刀を持しけるに命まを惜む。余りある臣の事中に汝一人身を捨て、武素懐
を遂るあれ上にぞ不忠者ぞ嫌しけまさるめ、弥々そ奈何なるのをとも
いつぐ備んでの縁と仰のし給と賞つまるに難波次郎が嫌しげなまを
そもそも実に由緒ある小臣因今元来ちまへ今此世瀬毒に浮んとせず
あぐるの太刀ありき。前年義平を素討中せしよ元此雷丸を一周つえて
あのき太刀をみ世にあらん武士のみが此太刀を佩まわしと思ひしかど君
が給ひく雷丸を此佩刀にさのみん。心志素ある人の義を侍る者のみ。
予て君にまうじたる今死に望ゐる。願ふはまを侍へ嗚呼のるゑ。と
おぼさんなども畏けまどそちのよまる給ふけ。さりとも、と想ひ太刀ちそれ
ばせめて最後に帯せよ。年来の宿志と今に晴しく今世の念残なきまで。

君の御恩義に感佩せん方ハ一も御親の君の仁徳小臣が忠義に愛て我今我助けんとするに雷丸の太刀ハ我家の長宝ともあらしめんと殊更なく出へ帰る。入道どのうち若首ニハ見分きぬまとめのり孝どの忠義をあらはしたるのみ。いかで一命を惜まんや。縛てまかりしてあるべしとはげに雷丸をもつて難波の如き仁おもし順義に感謝し。分て之に我佩たまへる。そもそも今日難波次郎此雷丸を持たるよしハ前年悪源太義平刑せられし時に難波次郎太刀取りたち此雷丸を見たまふか頻に欲しく思ひ借れども入道預で我身あまつさへ世にもなくて望果さざれども今日までありしに不意入道どの此太刀を。漸蚕に沈んとせし我因前に見て心猶にとりまたおまへぬなるに其の者水にをぬくとまた織に纏れかけ出し。主君我欺き雷丸をうばひとりまたあて水底に入蜜に水底くぐりまく。龍神に助けられしと備し。太刀をとつてあるまゝ

せんと彩のごとくに縁りまれとも知らずして清盛入道ハニなき忠臣なりとおぼしめされ。漸蚕に入らしめて。賞とする我深く惜ミ是非とかくたげく。ひき止めて嗟嘆ありし。暫し時移りし時に不思議や晴天の天候にはかに黒雲生。大雨頻にふりたく雷さへおどろおどろしく鳴り出するに人々おそれまどひて立騒ぐに一声高く雷電の響くと思へバ黒雲の難波が首に落るとみえし。忽ち四方に鳥羽まで暗となるほどに人々ハ我と思ひ伏拝び。大恐我ながら後のあまたハあるハ業なくと嘆き叫べる光景ハ叫喚大叫喚の罪人が呵責にあへるに異ならず。ひとあまた流漂しき次第は世にもあらで雲収り雷も止て天霽渡り人々蘇生の思ひをしてこれを見るに憐むべし。難波次郎未に五体断るるに死失たまへとハ怪しと熟ら見るに雷丸の太刀之あるにより。ぎちと相国入道も此術たちくをはしたまへり

布引滝に難波
雷に震死す
清盛

難波三郎

おそろしくおもひのへハ慌忙く此家を立出る庭を出して護身の今日難波次郎が

地方にして雷に震死せしなくなりたりし因縁あり。その奈何といふに去ぬる平

治に中納言信頼。おのれが権を逞うせんと源義朝をかたらひ少納言信西を

亡し。院も当今をも押籠まゐらせし。悪逆を道をおひけれバ忽地天罪を蒙

り。平家のためにて生捕られて刑せらる。此時義朝一家も悉くおほかた亡ける。

独義朝の男児悪源太義平ハ飛騨国へ赴き。密に兵を催ほさんと国人をおもむく。

義平に属ひしが義平喜び師の師をひきく。京師にへんとする時義朝尾張

国にほぼく。長田庄司がために害されぬときく。街に風声あつくなるに。

義平に属し軍兵共渐々に逃失て一人も居らざるありけれバ義平事の成

らざるを憤りて自殺せんとおもひしが。熟と想ひめぐらすにとても死すべき

命なりしを清盛の一太刀恨みて父の讐を報んと。ともに姿をやつし上洛し。

清盛を狙ひ居たりしが。対面をしくじりけり。時に平家にて其智ある三百余騎

をして義平が伏る所に向かはしむ。義平も戦ひて数十人を殺し。囲を遁れ

て猶も石山の辺に隠れしが。遂に平家の為に生捕られ清盛を難波次

郎にして義平が首を刎さしむ。此時義平難波に対ひ我戦の拙にあらず。

信頼と云ふ不覚人に妨げられて今日に及べり。これ天命の貴賤

等を分てあれど。武士を輝かるのみ。汝よく斬れおひろまく情ある死を勤めを

せよと云ひければ難波次郎。今更後悔なきとても何の益かある。

きらん。ある恩の賛あるやと欺え笑へバ義平ハ勃然として嗔をなし

難波を睨と白眼で。汝よ我死後雷となりて汝が今日の悪言を思ひ知らせん

ぞと白痴やと叫べば難波耳にもかけず遂に義平を斬てありし事の有

けるが。不思議なるかな今日此所にて義平が執念の雷丸を難波次郎が身に

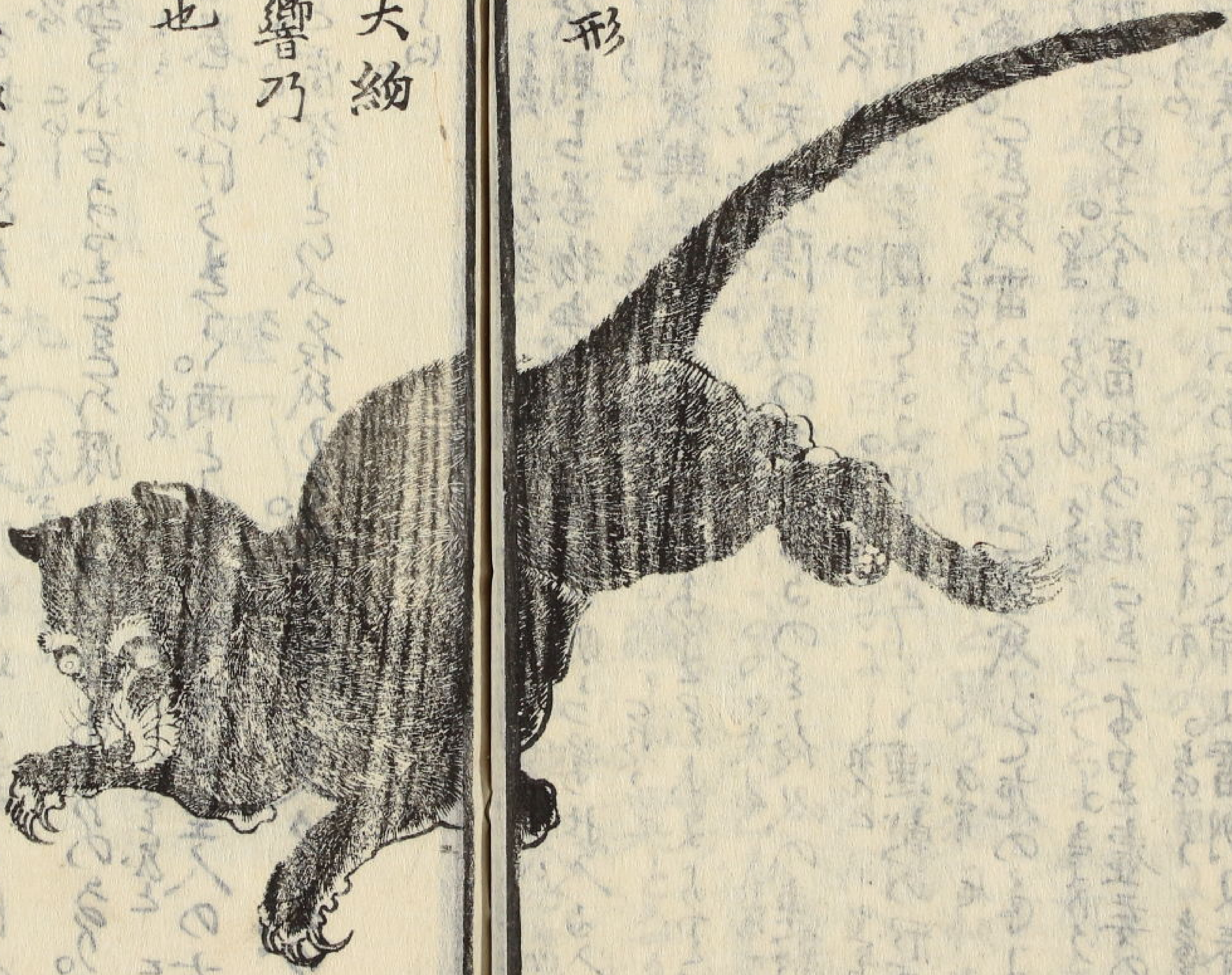
佩ものハ天色織のかゝる黒衣。霹靂忽ち震ひ發。南波が上に落降せ。震死
したる事が。前言更に空しからず。今日や恨を晴さるべし
○此書に関らざる事ハしかれど書實。平川舘の需に應じて。僕と平
川鎮と雷の事を考證せしもとに出しね。尹此稿成。投ぜる時ハ乙亥六月十日
なりし。今暑甚だしく。この時に平川鎮側に侍しく。此書を持しきとて時
既に晡後。左側なる所に。天微に黒雲起。孔雷暴雨頻りに平川鎮粛然として
貌を變。仰で天色を望に半時ばかりにして雷雨既に止。雲霽て上流
の月皎々と明に。暑氣既に散じて清風涼しくなり。此時平川鎮席をあらたくして
云。僕平治の演史を讀しに。仁安三年清盛入道。摂州布引の瀧に遊観
せし。難波次郎。相從ふ時に霹靂にあひ。其に蹴す。南波が上に降落し。遂に
震死せり。南波次郎。前年。義平を斬しとありしが。その霊の所為なりとぞ。

先生の論ずるところ大に同じ。今此稿成るに及て。雷雨あるも奇といふべし。人死
して雷となること。和漢の書に多く載たれど。我邦菅神のごとき人なく。聖より義
平の雷となる事も。此類にあらずや。否平日我幼稚の時より。菅神を崇敬
する事篤し。志学の頃より菅神雷となりしといふ說を。師に問ひ待りしに。
師の答ざるに。昔或人程子に問て曰。人雷霆に死する事あるは。宗
ならば不善を積で常に其心歎怒たる人。怨然として。震威を感じ。
恐懼して死するやと問ひしに程子の曰しハ。否ず。夫不善をなすもの悪
氣の赫然として震ふときは天地の怒氣なるとき相感して相遇ふなり
と。今程子の說をもっていふに雷霆の求めて殺すにあらねど菅神の靈に
して。衆人を威動するとあらんや。時平平日の邪悪天地の怒氣と相
合て。震死せしものならんと教へたまひき。師說によりて按るに其意

義平戮にゆくとき難波是が太刀とりしよしかの死を弔ひを志を愍むべきを無益の悪言を罵りて笑ひ嘲むること何ぞあさましや。その人となり狼戻なる推て知るべし。故に天地の怒気と己が悪気と相感じて震死に至るなるべし。平川舘常を拘て曰先生の言まことにしかり。数年の疑念一時に晴たり。席を改めて問まゐらせしは雷といふは何ものぞ画にうつせるものは夜叉のやうなるものの背に連鼓を負ひ手に桴をもてり。因て前年東都両国にて香具師ら見世物にせし雷獣と号し猫に似たる物を見せたり。是も雷公にあらざるや。否予曰僕不学にして人間のことだにしらず。況や天地のことをや。爾はあれど先師の語られしことあり。是を以て語らん。淮南子に曰陰陽相薄感じて雷となる。激して霆となるとあり。又王充が論衡に雷二月に地を出て百八十日を過ぎて八月地に入る。また百八

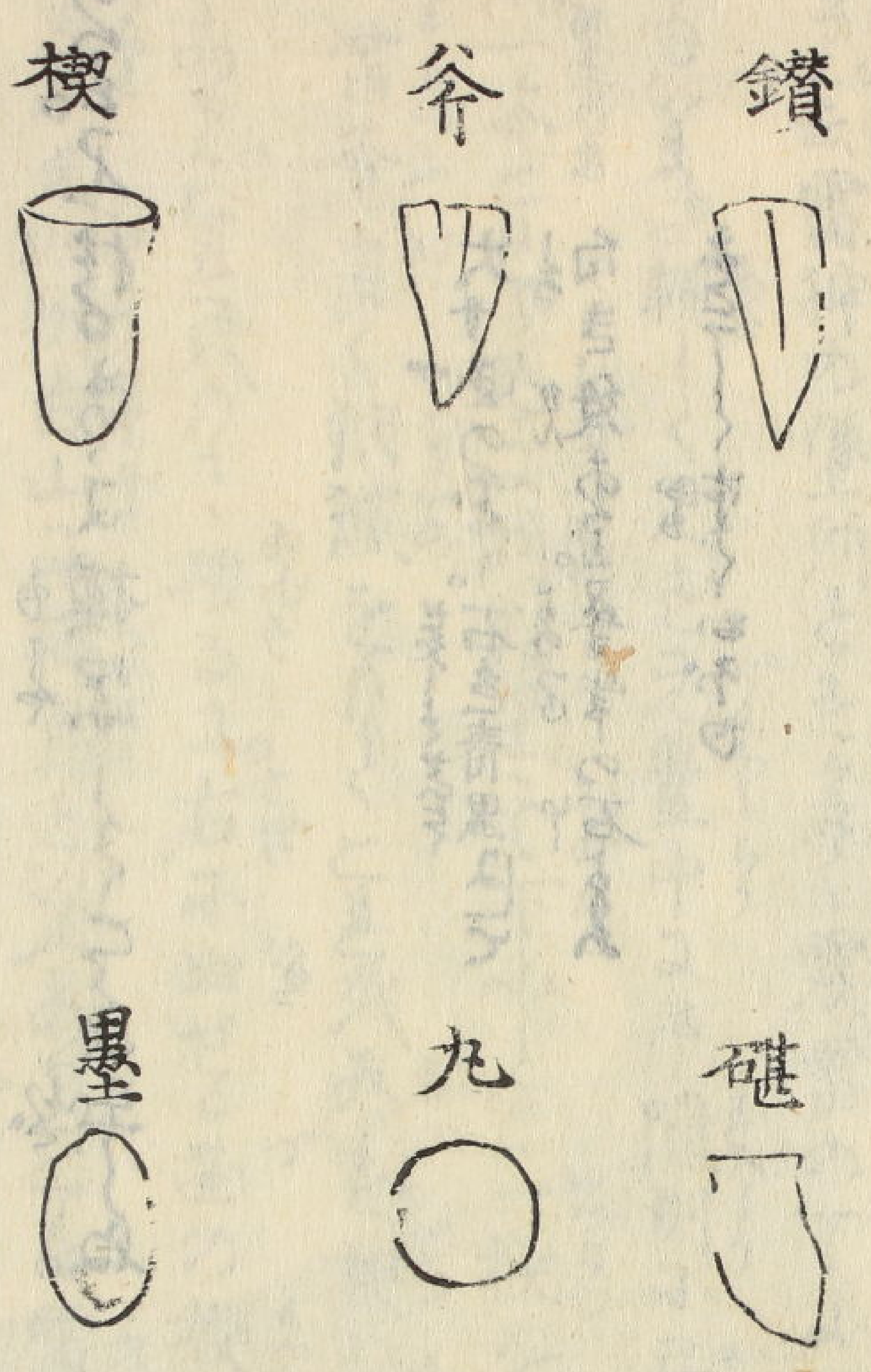
十日を過ぎて出る。出る則は万物出で雷入る時は則ち万物入る。入れば則ち害を除き出れば則ち利を興す。人君の象なりとあり。是らによりて按るに雷は形あるべからず。ただ天地陰陽の気なるのみ。夜叉の連鼓を負ひたる画の如きは論衡に雷の状を図する者畏々として連鼓の形の如く又一人力士のやうなる者を図し。是を雷公といふ。是に左の手に連鼓を引右の手に椎を持とあり。今の雷神の形これなり。虚妄の説なれどべからず又雷獣のことは実にありとおぼゆ。国史補に雷州に春夏雷多く秋冬は則地中に伏す。其形彘の如し。人取りて食ふといへり。今の俗にいふ所の雷獣と同じ。他邦のことは知るべからず。信濃地名考に立科山に異獣あり夏月雷雨起時小獣嶽よりおちくる。雲に入て五位蝕の如しと国史補に云処と大同小異なり。先年信濃なる知音の許より雷獣の形を摸して送り来せしことあり。其

捜神記曰揚道和叓於田中
値雷雨至桑下霹靂下擊之
道和以鋤格其肱遂落地不
得去色如丹目如鏡毛角長
三尺餘状如六
畜頭似獼猴
太平廣記曰月
支獸猛獸目如
天礒磹之火光
五雜俎曰雷之形



人常有見之者大約
似雌雞肉翅其響乃
两翅奮撲作声也
鬼説區々而不為一定
今此所圖者
本邦信濃国立科山中
雷獸也

笥の裡に蔵るごと同し。今平川館の為に縮写してこゝに出しぬ。
又平川館御中より一物を出して曰。僕前年羽州亀田といふ地方に遊べる时。折しも六月の比なりしが。一日雷雨烈しかりしに。忽ち霽ける后に童幼の慌忙く街上を奔走しれバいと不審くて旅亭の主に故を問へしに。その主のいふ雷後街上に。神矢の根といふものあり。これを拾んとて。幼童の立騒ぎくなるとあるに。これを奇なるものと坐に走出て街を尋るに矢の根に似たるもの二ッ三ッを拾ひ得たり。是本州拾遺に載たる。剣刀といふものにて。石中より出る小石なり。これハ深山幽谷にあるものなり。彼雷獣の雲に上るときにもに巻あげられて。雨とともに降ると。里人の古老語りきと是。雷に関らざれど雷斧といふ名あれバ。こゝに出して人々とひのよすがにて左にその図を出しぬ。

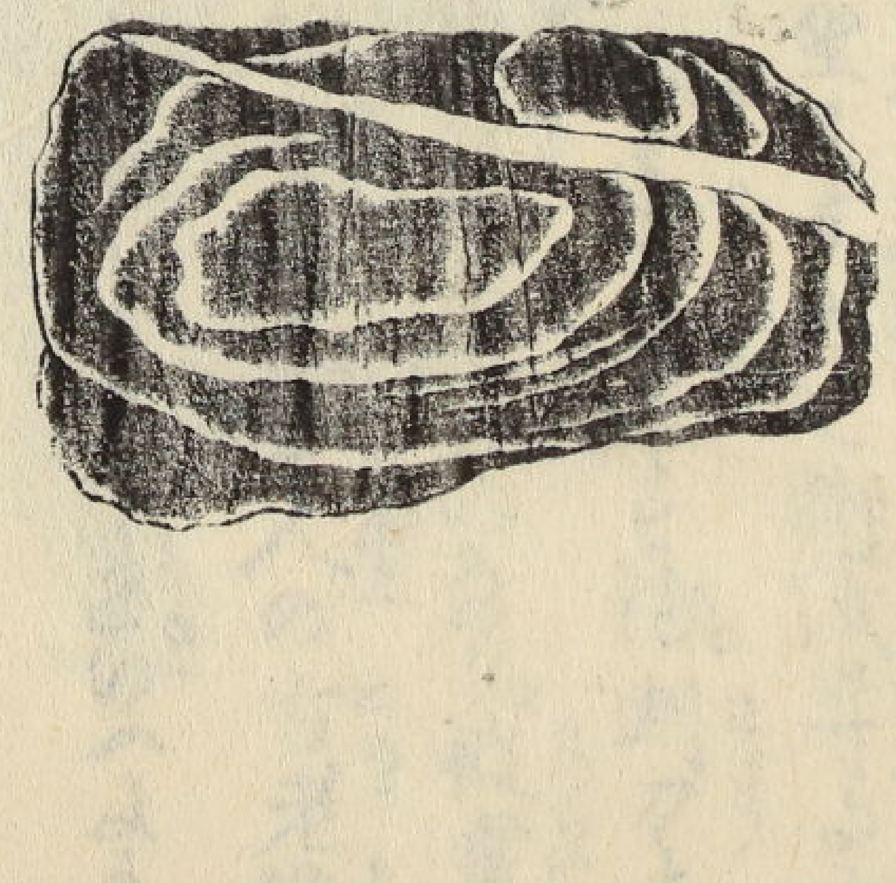


右六品ハ。本艸綱目に出たる所の。霹靂石の図なり。

右二品ハ。平川館所蔵の霹靂石なり。羽州亀田の里人より。神矢根と呼せる

なるなり。大サ図のごとく。石の中央稜ありて其端ハひろくとかく鋸のごとし。色ハ蒼藍にして蒼黒の雲のごときものあり。又全躰代赭石の如き色にして薄く白き斑なるもあり。予前年或醫家にして雷斧といふを見はべりぬ化石のごときものにして。平川館の蔵せる霹靂石とハ其趣異なるなり。見たるまゝに摸写してこゝに出しぬ。

大サ図のごとし。石色青黒にして白き紋あり。尋常の石より甚しく重し



雷斧のことハ。古今事類全書に筆談を引て。世人雷斧雷楔を得るものあり。俗に云雷神の墜所とはことごとく震雷の下におゐて是を得ると然れども未だ親しく見ずと云ふ。元豊中に予随州に居りしに夏月大に雷震して一木をふるはして折たり。其下に於て一楔を得たり。信に謂ふ所のごとく。凡雷斧おほく銅鐵をもつて為ると。楔ハ乃ち石耳。斧に似て孔なしとあり。これをもつてみれバ。茲に右に出せる図の楔ハ。楔にして孔あるものにや。○因に云加州白山に雷鳥といふあり。これを雷の獣なるとなり。今世間此図を模写して雷除とて売るものゝ列に考あれど本文の妨となれバ。こゝに記さず。今雷獣を恐るゝ人の為に。其見ゆるの形を図してこゝに出しはべりぬ。これハ僕が老婆心なり。

越之白山有鳥其名曰鶇字出爾雅朱冠玄衣青趾白腹翅端帶白如鵠甚愛其子白山高寒四時常有雪項下有阪曰五葉萬松環植數十里此鳥棲宿其間而未嘗他遊人所希見偶有觀者以爲瑞云能除火災後鳥羽帝嘗有聖製和歌膾炙人口州豪小武氏叉梅翁吾慶奉山靈締廬山腹以休登陟者之身上山者數矣竟獲覩之圖而傳之曩時屈早中納言實種卿拳進 上皇宮 宜図其像亭子宝永戊子之災亭免燬属者叉梅奉煩卿令孫實積卿傳以 聖製題其上幀屬予記之云

旹 享保十四年己酉夏四月也 長胤謹書

第七回　涙を浮べて朋友義心を励まし　血を滴して兄妹疑念を散ず

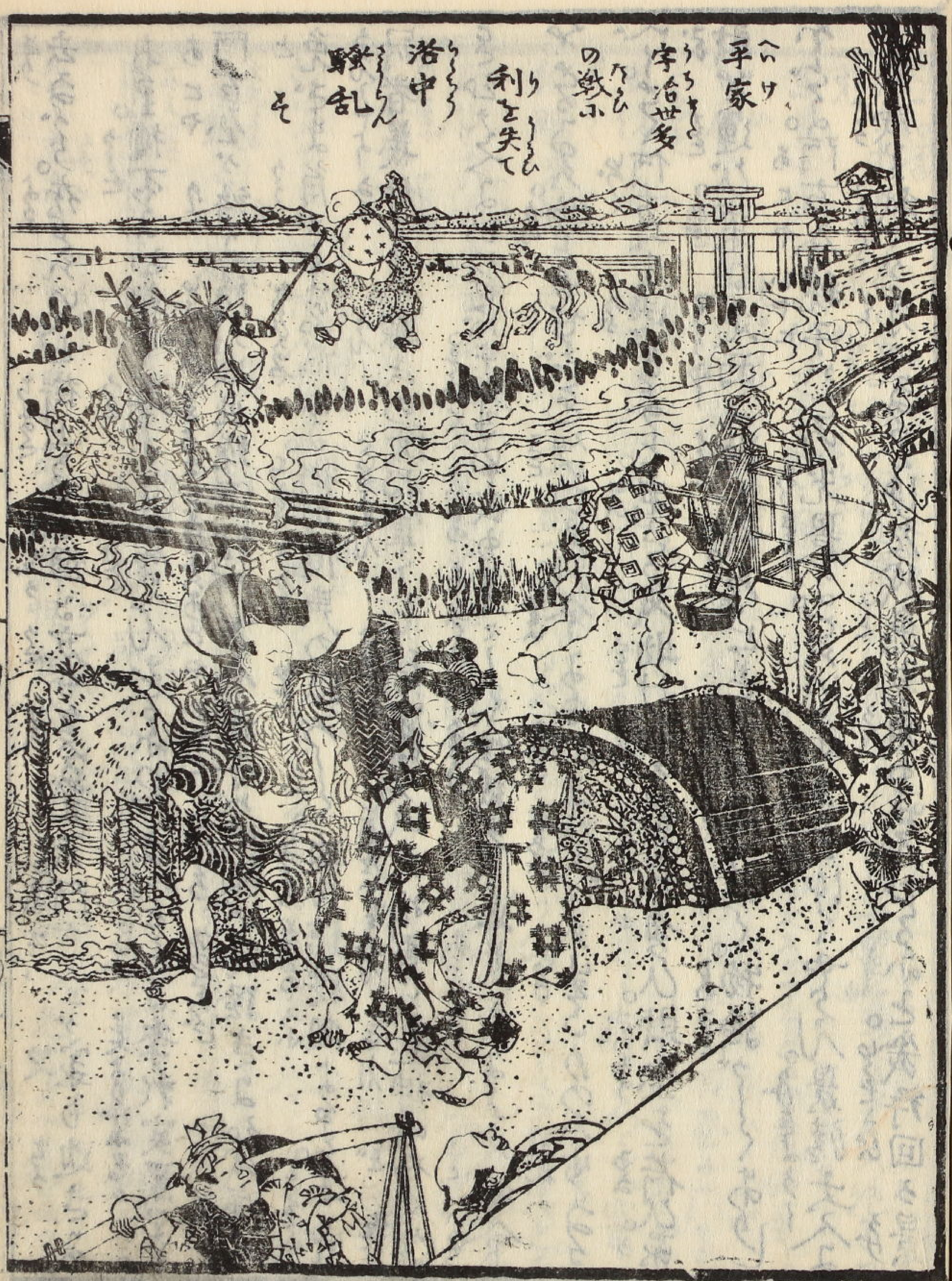
大政入道禅門の家人景清が傳に関らざれバ。此後説話なし。清盛布引の滝の後ハ難波次郎が最期を述ん為のミ。今茲に説話を序ぞ。寿永二年に移る。且説此四年前より。故義朝の三男。伊豆国蛭小島の流人源頼朝。院の密勅を賜り。父義朝の仇を報んと兵を催さしむ。東国ハ源家の家人恩顧のものあまたありしかバ漸々と附従ひ。今年に至りてハ八関八州悉く味方して勢ひ破竹のごとくなれバ。平家ことを制するの術なく。都までも動乱し。いかなることならんと。上下易き心もなきに。故帯刀先生義賢が男に。駒王丸といふものありしが。久寿二年父義賢悪源太義平が為に討れ。孤児となりしを残臣木曽中三権頭兼遠抱ひて信濃国に下り養ひ育て木曽冠者義仲と名乗りし。今回頼朝と一味して北国の勢を催し。越前国火燧山に軍を起し。平家より討手として小松三位中将惟盛。越前の三位通盛。薩摩守忠度に十万余騎を将として。加賀能登の国境まで押寄しに。義仲計をめぐらし平家の破軍を追ふて京師に攻寄る。平家の一門狼狽して都のうちにたまりがたく。安徳天皇を守護し国母建礼門院を具し奉り。二位尼を始め一門悉く都を落て。西国へぞ赴きける。此時上総七兵衛景清ハ。主家の先途を見届んと。同じく西国に赴んとすと。忠義無双の勇士なれども。恩愛妹背の道ハ捨がたきものゝ。清水寺阿古屋ハ人なりと如何にかせん。今回の西国落ハ主家の運の末にして。再び都に還るべきよしもなけれバ。今生の別れになる二人のなかの

に今朝は遠からく我が拙きを惜みと清水がさしく赴きける其途中にて不
意も長田の季致に行遭たるに季致は景清が手をとりて、さて慇懃に
頓首て云へりけるは某足下に逢んとて年来、因て今の許に来ること数回ありし。前
年の不義の挙動は猶存ぜる縁故あれば、今はあからねるの微ねども
聞へもあるべし。這個はかゝせしと云ふ者清も人の見ずとも憚りなくさてや
ぞ。○さて此ある所は阿古屋が懸念し。ありぬ我が清が素より手一本にて
など。○其臣たりしき者は清水の老媼が横死は難儀が事の我足下に罪を負せ
べく謀計なるのせし、かの某が世にある身と足下扇ゆゑの罪怒るまに
まあらし奈何なる事ん。荒々しくさへに禍のその身に及び来らん事源
くも悉く某患のみあまり足下に代りて、密か事に難儀を事に憂ひ困りを
させ今回の恥を報はんとおもひたち、しげく繁く足下とは我兄弟の。

安否ある事の由も世に知られざる間にし、あまつさへ我為に罪は怨ぢ。足下
にも寃にや及んと是彼思ひあまりて、且交を絶て身を捨て鬼も角もせん
まるの事どもさてこゝにも思ふる。阿古屋は不義をこひうけて怨み
呉越の間となりし我人も知らなく街の風勢となりく。不審云ふ順へは
今の容易しき好み便宜が有りて難儀が対し志を果さんと思ひ折から
不図も難儀を遁がたく當惑なり。又還る途中にて行遭たるは宜時なりと
そぞろ思ひをも世んと思ひその従者のこと對して、おのれ難儀
を漏らしをべきぬ彼、素懐を遂もしく空しく擒となりなんとも
念と思ふべき下より身を忍びて時を避り。其光景を窺ひしに
高倉宮の御謀反にて乱れてより世をなるに難儀させ亡び失ぬ
へ我をも害ひ今此時は恩人の恩を報はん秋なるよと

抑まのうち誠の不義の分疏し。交を復して西国に伴ひ以て年頃の恩義を報ひたてまつるべし此殺を免し給ば。赤心見えて覚へける。景清を一五十を交ぬに。長田太郎季教が。信義のかど感激し。幾許回嗟嘆し。類ひ少なる義士なるかな。足下が希の挙動は。故にこそあらめとおのひよ果して爾ある心なくいとおそかくもおかもなりし。某不肖えといへど足下を識こと今一回。對面なくして志を向明しと此四年。を意なくあをるのが世の乱に暇なく。うち過せしに不意今日こゝにうち来りひ赤心の言あるより年頃の疑惑晴ても斯る義友を何ゆゑに疎んずべきなるのあるぞ。我もまことを再の交を復さん志ありと回。季教喜び。幾許回頓首して拙いなし感謝せり。その景清季教に對ひ。今の世は奈何ぞや。小松どの失給ひて善政ともなく。一門驕奢に耽るのみか民恨て背きて。頼朝義仲木に附從平家の命を受ず。斯て今回西国へ赴くとも何時再び都へ還るべきやらんや。平家の運の限なりとおぼへず。数代の恩を報ゆべき秋至れりとおもふなり。死すべき覚悟は極めしが爾るに足下を伴ふは義においてもあるべからじ。某が為に思ひ給はず我にかはつて討死を遂もしなば我主家の後世を冥福とすることは卿あるよりもなしのみぞことに勝るもののあるべからずと。涙ながらに説き聞しけり。季教もともに感涙にさし俯き。暫時言葉もなかりしがましかば背きてうけつ。宜なりと道理ながら。某もまた武士の数にいる身の言出し言を空しうせんざるは男たる者のひとつに似たり。いかに辞みあふとも受ひ止るべきと思ひとまれる光景に景清その義気を感じ。是もちかくと言入りけるに爾ならば思ひなかりし我は下に

當岳と論して
朋友義を
励ます
景清
季親


平家
宇治世多
の戦ひ
利を失て
洛中
騒乱
そ

去るから。夜といへど街上るゝを憚る方もなかりければ。阿古屋が家も近きに
ありし彼所におもむく姿しき成竹の人かげもなく。いざその人と云に季秋実蘭子を。
阿古屋が許に誘引ね且暁迄程阿古屋親子は此頃の物騒きに心痛め。
兎ざま角ざまに苦悩むに。街の風声の恐ろしく。近日信濃国より。木曽
冠者義仲とて。源氏の大将軍にて攻上りて。此大将軍は鬼神のやうに猛
き心ざしにおはせば。其手の兵も荒々しく。情しらぬ荒夷なれば人の命
を取る事物ともせざるを。何ば今にも都に攻入らば。生るもの少なかる
べし。何方へも逃れよと。老たる者助け幼きを負ひ。財宝を荷ひ家
財を運び東に走西に馳れば。ちまたは馬の沸がやく。物騒がしくありし
かども。阿古屋親子はこの光景に。とかふいふるまゝゆくゆく立ちとん。景清大人に
よく似たる身のうるさゆゑ兎も角もせんずると。武骨回ろ景

清が捕えけれども此程は日毎軍の評議とて。六波羅の三条に居れば絶えて見え
ざるよしなり。斯ても我と敵のためなれば。亡きんは必定なりと母子夜盗家を
て居たりしが。今日初夜の左側に羅登名なる二人の武士阿古屋が門を叩き
立休らひつゝ物語るを母の五十奈何心なく外方をさし覗きて不審く
紙燭を照しまぼしけるに。笠に面は見えねども。まがふべうもなき景清とつれ
だりしかば。痛もあへで声をたてゝ女に阿古屋に景清ぎみのおわし候るに。
人丸を倅ひつゝとく迎へ奉らせよと呼立られて。阿古屋は嬉しさやる
かたもなく。慌忙人丸が手を携へて。門まで走り出侍ひへ。景清は
季秋に会釈して同じく家裡に入らんとせしが。兎さしの人と季秋は禱くる
羅登かれとる阿古屋は狼とさし覗くゝるまゝ年に不実の云かけ何方た
る立去りし。季秋はなくあゝ呆れて。驚き乍ら何ゆゑこゝに来りたる

と不審りてぞ居たりける其時景清季範が一室の裡に請じ入阿古屋に對
ひていへりけるは季範どのは前年おもとに不義を云かけしるへ情我為ふして。
一時の行儀にあらざりし。今日不図も還合。其履歴を語るに心ざし節乃
戯謔言ひしはなだしからず。今又我をまのあたる。縁故のある事にあらず。
此所に於てまのあるし たゞよく饗應我中せらると云ぞのあるぞ下のりして。
季範小膝をすゝめ云今更なんともあらんこと系は面目もなく只分身ぬ。
前年の媱言も己に權謀にして某が赤心にはあらぬ子細は此あらく語
りもらんたゞ何事も免し玉へと述ければ阿古屋は猶ひとく神ならぬ身
は爾るもあまりとは思へど然しもちくさるをかゞりに云罵りならく
猶ひまのあるとの母の五十奈さへともなすまじ過失を免し玉へと
述ければ景清阿古屋親子に對ひ詞をとは言ひかけて季範どのを

饗應のまうけあるせと親子我が立しかく后季範にうち對ひて云へり
けるは目今途に迷へのか足下が篤き心ざしを無ふさるとはゆめあらねた。
最期の限に朋友を伴ひも身の其忠戦さる其の難かるべし某が為我
思ひまでに一つの怨をあるとどや出んも知らしと斬我背けく云か孫
たり季範眉我をあらくらん最期と覚悟極めたる戦場に友我伴ふ
を妨ありと宣へど強く云べきにもあらじ爾るに和に思ひとある我身に
包すみな我に獨我をあかゝ奈何愚苦のあることも争で辞と得るべき
たゞしは甲斐なきのせしものひ実る我語りまうねあやと少し怨むる
含みたる光景我なくて景清の両手を洗へ面を和らげ。ありて旅中の
と我做まべき差こ隔情る皆あらぬ孫どおまかにたらなく唯こしけるが。
為の人との知らぐ。あらぬ怨こ我愛すべきまぬ今は何我が包こたべらん。

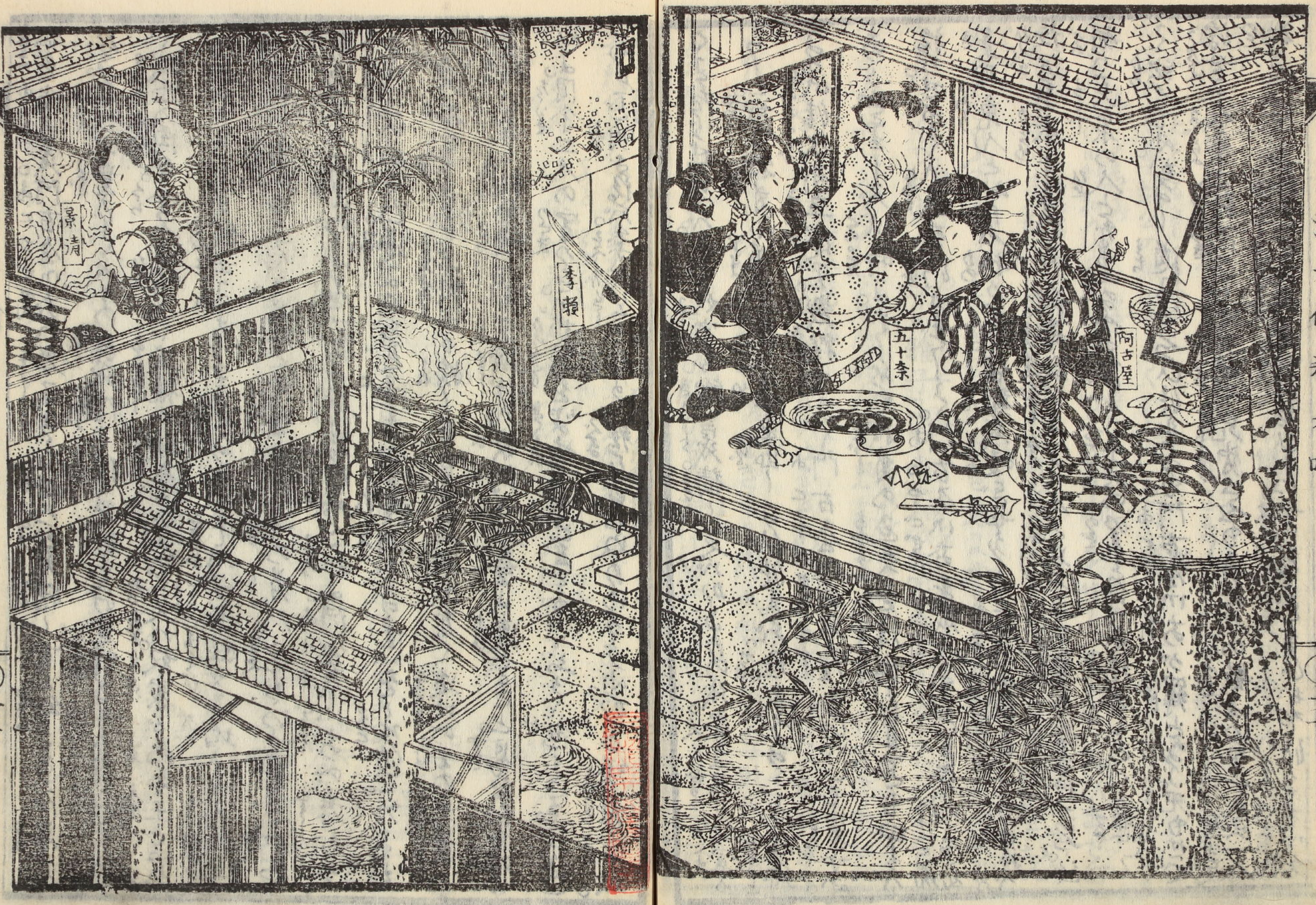
かゝれど莞爾と笑ひつゝいふやう。凡て士たるものゝとく〳〵。妻子を思はぬものやあるべき
と。人の謗る所妻子あるゆゑ。むかしはむけに捨しめしが。今身の上に思ひしる。今回は
君のために潔く討死し。数代の恩を報んと勇ましく覚悟は定めしかども。
まづ妻子を置去にせしや。敵に生捕られ。恩愛といふ羈絆にからまれ。おもはぬ
不覚をとると極らば。いか〳〵にも無念におもへども。今は朋友の好身此時なり。足下
我を不便とも。おぼしめさば貴とき恵と。妻や子どもが身の上を救ひてくださ
れ。骸をめづらしくなんと言さして頬に眼をふさぎて。さながら落る泪うちかゝる
ひたりける。季教は諸手を組て景清が言を熟と聞て長き息を衝ていふ。
足下が心へ思ふよしは何まで背くよしあらねど。今宣はせし一件なとつは
義利かくまるまじくなるぞ。その縁故を奈何といふに。人丸が子は是非へ
某が力の及ん限りはいかにも養ひ育んが。阿古屋は女性といへ殊

又年紀も若ければ一時の権謀なるべし。又前年懸想の御心なりし故
よは実ぞと思んものもあるべきに。今その人を相伴して何方へも立
退かば。不義の汚名を蒙るべし。なれど名を末にきずつけんよ。いかにも無念にあらぬ
共足下が実名を汚さんと思ふ心に比べて。某が心を猜しはと謂ふべき気色
なきを。景清は能く今さらに又言出ん言語なく。黙然として居たりけり。
時に一室のうちより声して。此二人の宣ふ事を言双方ともに道理なり。この身
故く思ひあひそ。季教君に今阿古屋を俱しのぶとも。嬉しくわたる
此名を惜しみ給へば。其身を履歴を語りたまへぞと。紙門をさつとおしあけて。
五十奈は阿古屋を伴ひて立出るにぞ。景清も季教もおもはぬ不審にて。
そは奈何にそは奈何とばかり顔を見合せねといぶかし。同に老母の五十奈その
身近くひたと下りて。両手をつかへて言ひけるは。積るも涙を拭ひけれど。

いふべくハ今回季彰公阿古屋ハおも狭とおもふにハ夫のあらんと我身の
懺悔をなしたべてまぬ。そもそも二人ハ兄弟にて。ましてまとるハ知らしめをまじ。
奴家ハ素季致公の側室にて。くさびりしぞや。老さらがひとく知る身となり
果るハ主の恩封。縁しき限りなく。宮へんにあらぎ出しめし女人思ひ出せバ
九年あまり。季致公ハ夫婦の中よいまぞうたしと見侍女に召使の主ありしん
慈愛をまのうのあまの中を季致公の御寵を身にあつめしが悪因にて心驕り
おそろしくも。奴家が生子の雅子にもあらバ此御家の世嗣となり。世にと見
めざらくあらんとのとおもひ狭ふ悪念ハ若殿にて坊なり季彰公の
まをまさざりと明暮心に念じまいらせさまでのるいにあらねども。季彰ぎみ
のろしめすとしいへバ是彼と。悪ざまに纏ひ。数々いへバ季致公。初乃
ほどハ爾るよしもあらざりと思ひ疑ひ給ひ。踈じ果ふせられしが素より賢

くまたらせ給へバ。終に奴家が讒言を猜しられバかゝるうき身となりて。家に居んハ宜から
ずと思ひて我身に眼を家の人に暇を乞ひ出して家を出しかバ。さすがに故郷
なる此清水に立還り。幾程もなく阿古屋ハ御産まの事して男子を。
あらざりしが此時にはじめて我身の過失を。後悔すれども益なけれバ
詫べきやうもなく此身を汚さじと。阿古屋ハお子を成人さして。其功にて勘
気を免んとおもひしに苦艱を凌ぎがたくと。五月あげまいらせしされバ
便宜を求くるにも。季致公に伝へんと思ふに甲斐もなきにや。故
郷へ帰りて人と手を中に。わりなく年頃の望ハとくに絶るとも。いと悲しく
く続くもなかりし道にとおもひしかども阿古屋ハおが羈となり。死もせで
浮世に存命る難面うちに父母や兄弟さへも亡人の数に入りて只一人
残るハ浅ましき海士小舟の楫を失ふおもひ。世をたゞまよひおがはらかなくて

血を滴らして季教姉が ゑわたを



有様を光景ハ阿古屋ハもとより孝子なれバ。母の病気精し。女子ハ幼きより学び
たる。糸竹の業もて人々の興を催し。儲る。わづかの給金ハ日々の薬代とこれ
や猴子の菓を食ふに均しく。浅猿や。猴麿ゝとど父ハ奴家が為ニ主と云ひ人
とあへよし。ある武士にまじまはるれバ。その子を妓女に均しき白拍子
にさへそ。無念のゆゑんと云へど甲斐なき女の身なれバ。まゝいふべき事なし。
寄る辺なき身のうへをなげきて住居る処に。阿古屋ハおのが孝心を。
景清公の知るところとなりて。遂に思ひ子まで産月とるを期をよろこびて待ちゐる。
父ハの名も下さると末頼もある嬉しさに云ふ間もなく。近比の世の光景ハ
貴賤ともに乱を避んと立騒げバ。奈何なる憂にも逢やせんと易き心もなく
ぬに同全二人の宮の中ハ物語を聞に嬉しき事。更にすがく包みきるゝの
あはれと聞さ給ハバ。季秋公の思ひ寄らぬあるにかゝる縁なるべし。

季秋公にちかづきて阿古屋ハおん妹君と知らしまさね。疑ひ富く。おや
しきさんが生みし妹君に白拍子のあさましき私辱にあまるのみならんといふが
と明しまへ下ぬ兄妹と悪しき御かく包み隠せしとは悲しけれど知りせども
兄妹とたゞしの徴もあらぬ物から。疑ひしくもおもふと答ふべし。むかしよりして
人のいふなる血と血を一つ盆に注ぎて兄妹なれバひとつになるとぞ。代へられバ
かまへてかくと試みんや否やと云ふ口の下にあるまじ手なかりしも。阿古屋ハ懐剣抜
放ち秋と秋とに肱のあたり切りけバ鮮血滾々と流れ出て。母五十奈ハし
くもぐら人のいふ事と。例にあはぬ血の流るゝ血しおの結ひ留れバ。季
秋眉に皺寄せ。急速しと云ひける素振で何とあるべき。兄にあら
ねども。女子ぐさへ爾ならま不雄しさる者ありとのゝ我いはず。寧ろ
あさましとあらん。景清大人は迎せまのとりあるまい。腕を盆の上にさしし

訝に腰刀を抜て切裂ければ。おびたゞしく血しほを盃のうちへ滴落ば阿古
やが血と一ッところへ合せけるに。景清季秋諸ともに五十奈が言の偽ならぬ
ねば不思議の思ひをなし感激し季秋阿古屋にうち対ひさて汝が母なる
孫のみなるに我妹にあるとはいかなる故ぞ。その年父上の。縁季のどのよまゝなる桃乃
下にありける前に一人の妾ありしが正しく妊身となりけるが。御縁故ありて身の
暇をとらしたりしが程なく産けるや。其子は男児か女児か。しかと知るものもなき
なれども今かの手に生立して。人がましくなりてありなば。聡く一国の主にも
なるべし。汝はどちらを母を尋ひ出しけるが。今父に対面せんには弓矢とる
身の出生し言語の定かならぬ心強くも思はれ。汝も外に兄弟のあるを。
ある身はいくも後の折もあらば年を経て。父が縁正の言絶。
よくよく心へよ妾が母は京近辺にありと聞しも。と言捨しもあの

なりなば。聡く母にかけありしが。何国をさしてたちしらざる。地方知らず然ば詮なく
なく。今日までうち過ぬ不図も環会たる妹はお今さる貴女思ひ出を亡き父上の
在りしに。思ひ見るは慈養を思ひ見んや阿古屋はお五十奈にむかひ父上
を必ず恨みたまふな。帰来は見し者へ武士の言葉の二言なきこころかくし
と思ひあきらめね五十奈も今日より是しく妹なる嬉しきに亡父に再び逢へる
こゝちぞすなれ。これより后ちは力とたのまん兎も角もせんざるに。心津よく思ひたまへや。
五十奈はおもとも今日より我を阿古屋と思ひおもひ世も隔てなく涙と
ともに守ける。阿古屋親子は其人に。名残惜しき貴女懐しきの。
後は彼みせし阿古屋と聞きやぬぎ。奴家幼きとも見えし近き友たち乃。
物見捨にて出る時は父母や兄貴と。うち連立て出れば。今度はまた心ならぬ義
さく。家に還て母上に奴家が父は兄貴は。ましまさぬや奈何なぞと問ひ

まへらまされハ母上ハ涙よりまく寡居おはせず父ハ兄上ハひとしき武士におはせしかど。
御家故あるまく。今吾ざりておのれとなり。母らく成人なすとなかりぬん気のどくし
まつらせへしとさうしの命を嫉しくて。指折屈て年紀父母へ幾年経まし
幾歳あるときやく月日のたつうしに窮しきもの父上や兄ハにつき絶さる
ものと行よ甲斐なや父上ハ今も今も世よの死人とうなりまひぬと心の悲しさ。
をひ出らそ見へり。其后せめて兄上に逢まいらせんと心すりハ絶へぞ思ひハ
あらまるのから。それ爺父母上の我身知らしめハやに尋ねまゐらす身ハ眼あく我
年月をおくせしに年頃日頃尋ね入る。甲斐なく今日一不意げらしと思ひ見
え。厳君上にえ気をきて嫉しさにまこと思ひ出を父ハのるが。一生知らぬ果る身ハ不
幸とまて待ものはぞとよ老泣けが母五十余阿古屋が背代拝ていかなる嘆
き有世母が不良ならん。なぞうし嫉へくたべに阿古屋ハおのれらぬの孝子に父上

と知らぬ飛罪な奴家なりき。今さら千悔万悔も及ばぬ稍の苦しさよと外将も
てぞ泣沈む。素より乾涙かしぬぐひ人ぐふらく嘆きあひそ是渾天の命なりし悔
むハ詮なきそのなるぞや。妹も父なく成人し。當世二なき忠義の士の景清どの
と男に持子まで其の世ハ幸福なの天晴女の誉ぞかりとまに心残りもなく。妻や
励ましく深き忠義の美名を揚させ父ハも身の勤にあらぬぞやと云励ましく
景清に再び對ひなく云へりけるが前刻足下阿古屋が我わらぬ人とかくぞ
云知らぬ辞させしが今妹と明白に知るえいかぐ辞まん某力の及ん
ならバ妹と姪を養ひて。敵の手より救まいらせ妻子にも再会させしく深き
忠戦遂ぐも我ちまでその身のうち子孫のための大慈ぞや。蘭ちおさなど
やとあるまけるに景清完尓とうち笑ひ。あるは哀し哀し。蘭かくしあくで姉
おとよい。いらぐなをきましかさん。我忠戦ハ足下の賜わるの洪恩を生々世々。

猶忘却あるべからずと深く感謝しいざ〳〵と立出んとするを季兼は景清が袖引とゞめ。忠義に死するは勇士の常。それを辞するとはいはねど帝剣のみも是下が宜し。今回の軍利あらば兎も角も生べき覚悟はしと笑人の及べし軍までの今世の別とおもひもなば。今夜なりとも此所に居て。妻子をもよび集ても名残を惜まし給と云にさしもの景清も岩木ならねば得かねる折から阿古屋が膝に寐し人丸のにはかに物恐ろしと叫びて景清が膝にとりつくのみ父上外へ出たまふなりあらむ〳〵いつまでも此所にお在よと泣つ いふ我景清も熟とながめて人丸をかい懐ひて云けるは我見るまじくして子を見すてて其素が最期の門出を。嘆きく汝が止るが可愛のものよ不便やなおよそ我子にありながら。とくに逆へとらざる弓を慈めしと云へし思ひそよ景清は未だ色にめぐ。氏も未だ至ざる白拍子を。娶りし子まで生せしは好色のものと世の人の口碑にかゝる口惜さに宜

折あらば逢んとさゝくてこそ勝をも見せしぞや。今日ちじめし母が素性知らで今さら逢へ見ば後悔をもなす甲斐もなし。我も平家の一門にて人も知たる武士なれば今回主家の凶大事に不覚残せしと思ふなら。戦場の露と消んねかし今日より叔父を父と思へよ。孝行を尽すべし。不孝なら嫁に勇をお比。父母の名残汚しぞと言。清く阿古屋が顔をかんず。我と情なきものぞと怨こもひぞよ。今云しやさき我が為なく。昔なれども我妻ぞと呼ばざるとは申さぬぞよ。我亡後は季兼どのを杖柱とも頼てまのあたり此子を成人させしくれなば我も冥途の五十奈川おもも。人丸が為にてゝも頼むと云ひさしてなく鬼とも欺く景清も恩愛妹背の別をすれば剛者猛者の分別なく涙ぞ袖を濡らしけり。阿古屋は前別より泣沈み前後不覚にみえへけるが此時病甲面をあげ。奴家も武士の女児なり。嫁と生くは右札まへ。いと恥しく候れな。

天とも頼みし夫の生死も知らぬ戦場に赴きしより便りもなからねば、涙しく
あるまじと思はれ免れし身の人とむかしのごとく又打ち外で嘆きける。五十奈も、おなじ
思ひみだれ、外流るゝ居たりしが、女ながら形を窶し、孫や女児は季教公の。
かく縁ひある一つ血筋ぞ悩しうみだれしく勇ましき忠戦見るもの歎きを
浅花と切散しく平家の御運命も再びとても危くなる花の都に見えり
咲園せしき対面もしくたゞ爾は思へ今月別れて後、またも逢ふともあらんこと
べきに。今宵むざむざと居て、孫や女児や奴家にも名残おしまざらんや
孫といふ倒かなきも季教が、五十奈の老嫗も爾も入りまいらせ今宵べし
多人且の外べきや。後も移く居ますもあり、平家の御内に名もたゞき。
大剛の者と呼ばれる侍大将景清が妻子と源氏に知らるれば、捕へられて
入牢になるもしらん姪妹。奈何なる憂目に遭ふらん。その外のことなりがたし

足下が心痩は忠義の妨なり。よろしく某が言葉に従ひて、伊場十三と名を改めべし。
従べき方は役宮の地を撰ぶべしと涙ながら今宵寛く殘れといふに景清、実
爾まと今宵は此所に宿りけり。

景清外傳 松の操 巻之四 終